また会う日まで

山本披露武

一、赤い糸

「ねえ、わたしたちの出会いからのことを書いてくれません」

生前よく妻に言われました。けれども、わたしはその都度曖昧な返事でごまかし、進んで書こうとはしませんでした。

そのようなわたしを横目で見ながら妻が話し続けます。

「ねえ、そうでしょう。もしお姉ちゃんが病気で休学していなかったら、そして、お兄さん（義兄）が神戸から高知にきていなかったとしたら、お姉ちゃんたちの結婚もなかったし、わたしたちの結婚もなかったのですよねえ。ですから、やっぱりわたしたちは赤い糸で結ばれていたんですよ、そう思いませんか」

わたしたちが出会った時のことを懐かしむようにして語っていた妻の声が今もわたしの耳から離れず、どうして妻の願いを聞いてやれなかったのかと、悔やまれてなりません。

赤い糸といえば、わたしの方にも、それと思えるようなことがありました。

アルバイトを紹介してもらうために学校へ行こうとしたのですが、定期券を忘れて取りに帰り予定していた時間より三十分も遅れてしまいました。そのため、希望していたアルバイトを紹介してもらえず、代りに紹介してもらったアルバイト先で親しくなった人が後

に妻との出会いをつくってくれたのですから、やっぱり、単なる偶然とは思えないような気がするのです。
　そのことを妻に話しますと、
「是非そのことも書いてください」
と言われて断り切れず一度は書こうとしました。しかし、何故かペンが進まず、二、三行書いてやめてしまいました。
　だからといって今更書いたところで作品の依頼者であり、一番熱心な読者であった妻がいなくなってしまったのでは、もう書く意味がありません。そう思って、わたしは書くことをあきらめていました。
　ところが、しばらくしてわたしの考えが変わりました。たしかに、この世にはもう妻はおりません。しかし、もし妻が天国で作品ができるのを待ってくれていたとしたら……、いや、もしかではない、妻のことだから、きっと待ってくれているはずです。だから、天国で妻と再会するときの手土産にするのです。今からでも遅くありません。それに、どんなにへたな文章でも、妻だったら喜んで読んでくれます。そう思って、赤い糸を、今度はわたしの方からたぐっていくことにしました。

二、義兄との出会い

夏休みのある日のことでした。クラスの仲間でつくっていた同人誌の打ち合わせをするため神戸の元町にあった喫茶店に行くと、先に来ていた中山が、
「山本君、経理関係のアルバイトをさがしてたんとちがうか。もしそうやったら、はよう学校へ行った方がええよ。求人ビラが貼ってあったから」
と言って教えてくれました。経理関係のアルバイトを探しているなどと言えば簿記が得意と思われそうですが、そうではありません。簿記の時間が眠くて仕方がないのです。でも、もし経理関係のアルバイトをすれば簿記に興味を持てるようになるだけではなく、お金がいただけるのですから一石二鳥です。と、虫のいいことを考えてのことでした。
翌朝、学校へ行くために家を出ました。ところが、先にも書きましたように、定期券を忘れて取りに帰ったために予定していた時間よりも三十分も遅れてしまい事務官から、
「山本君、遅すぎたわ、一足違いや。さっき、有村君に紹介したげたばかりやがな・・」
と、言われてしまいました。
その一足違いが、わたしの人生に大きな影響を与えるのですが、その時はわかるはずもなく、がっかりして事務室を出ようとしました。すると、

「ああ、そうや。もう一か所、求人があったんや。証券会社のアルバイトなんやけど……、もしよかったら紹介状を書いたげるよ」
と言って、別のアルバイトがあることを教えてくれました。後期で証券市場論を受けるつもりでしたので、わたしはその話にとびつきました。
（よし、これで、証券市場論は勉強せずに優がとれる）
そう思って、さっそく紹介状を書いてもらい、N証券の大阪支店にいきました。そのN証券で親しくなったのが高知大学を卒業してきたばかりの、小淵という新入社員で、後にわたしたちの橋渡しをしてくれただけではなく、わたしたち夫婦の義兄になってしまった人だったのです。
詳しく話します。その翌年のことでした。わたしはN証券のアルバイトをやめていましたが、小淵さんが結婚するということを耳にして家まで訪ねていきました。すると小淵さんが大変喜び、
「そうだ、山本君、僕のフィアンセに妹がいるんだ。君が卒業して就職したら紹介するから一度会ってみないかい」
と言って、わたしたちを会せてくれたのでした。といっても実際に会ったのは、それから一年以上も後の、正月五日のことだったのですが。

三、妻との出会い

今も思うのですが、もしわたしが定期券を忘れず、予定していた時間に学校へ行っていたとしたら、わたしは経理関係のアルバイトに就いてN証券には有村が行っていたかもしれないのです。もしそうなっていたとしたら私と妻との出会いは無かったと思います。が、事はそれだけですみません。もしかしたら有村が小淵さんと親しくなって、妻を紹介してもらっていたかもしれないのです、

そのことを妻に話しますと、

「有村さんでなくて、よかった」

と言って、クスクス笑うのでした。

と、まあ、そういう訳で、わたしたちは紹介してもらったあと一年ほど手紙のやりとりをして結婚するのですが、その間に交わした手紙の数が二百七通になっていました。そのうち妻がくれたのが百三通でわたしが送ったのが百四通、その百四通の中で最も妻の心をとらえたのが、二月十四日、バレンタインデーに送った手紙だったそうです。

その時のことがよほど嬉しかったのか、妻は何度もそのことを話してくれました。

話を戻します。その結果、話が急速に進んで年内に結婚ということになりました。が、

困ったことに、就職してまだ一年とちょっとのわたしにはお金がありません。
　そのため結納金は無しということにしてもらったまでは良かったのですが、「代わりに、式と旅行とアパートの敷金はわたしの方で持ちます」と調子のいいことを手紙に書いたために金策で頭を下げ回らなければいけなくなってしまいました。まずは式の費用、これは親に出してもらうことにしましたがそれ以上の無理を頼むことはできません。で、敷金の十万円は、叔母に頭を下げて借りることにしました。それでもまだ旅行の費用が足りません。
　当時関西で人気のあった新婚旅行のコースの一つに、神戸から船で別府に渡り、後は観光バスで北九州を回るというのがありました。しかしそのコースの頭金五万円（交通費と、食事代を含まない宿泊費）を払えば貯金が底を突き、食事代やチップなどを払うことができません。かといって他のコースに変更はしたくなく、困った末に、一年ほど前に結婚をした会社の先輩のところへ相談にいきました。
　すると、「山本君、心配せんでもええ、最初の一日だけ、パッと気前よく払って、二日目からは、『あとは頼んだよ』と言って、嫁さんに任してしもたらええねん。ぼくもそうしたんやから」といって笑うのです。で、第一日目の別府の旅館を出る時に何気ない顔をして、「ここはぼくが払うから、後は頼んだよ」
といって、先輩に教えてもらった通りにしたら万事うまくいき、万々歳でした。

四、えっ！　妻がヘソクリを

うまくいったと喜んだのも束の間、新婚旅行の二日目で財布がカラッポになるぐらいですから旅行から帰った後も、給料日までの生活費は全部妻に出してもらうことになってしまいました。

それだけではありません。当時わたしの給料だけでは生活が難しく、不足分はやはり妻に出してもらうことになり、結果、小遣いの決定権を妻に渡さざるを得なくなってしまいました。が、それは仕方のないことだとわたしも思っています。しかし何年かたって、わたしの給料が上がっても、妻が小遣いの決定権を握ったままで返してくれないのです。それにはホトホト困ってしまいました。

ところがです。その妻が、

「ヘソクリを始めました」

と言うのですからびっくりです。それも、本人の口からです。

でも、ご安心を。なぜかと言いますと、私が見たいと言えば妻はいつでも、ヘソクリの通帳を見せてくれると言うのですから。

それではヘソクリと言えないのではないかとお思いでしょう。ところがそうではないの

です。ヘソクリとは元来そういうものなのです。
ちなみに角川必携国語辞典を見ますと、
「ヘソクリとは倹約をしてこっそりたくわえた金」
とあります。しかしたくわえた後で夫に見せてはいけないとはどこにも書いてありません。もちろん、たくわえる過程で悪事をするとか、支払うべきものを支払わなかったというのであれば、それはよくありません。
けれども、倹約をしてたくわえるというだけなら、それは大いに喜ぶべきことだと思うのです。
とういう訳で、わたしは妻のヘソクリが増えるのを喜んでいました。
おかげで、退職して転勤者住宅手当が出なくなり、さて、どうしよう、退職金だけではマンションを買うことができないし、と思っていたら、
「私が半分出しましょう」
と言って、ヘソクリからポーンと出してくれました。そして、
「私が財布をにぎっていましたから、マンションが買えたのよ。もしあなたに任せていたら絶対に買えなかったわよ」
と言って、嬉しそうに笑うのでした。

五、吐血

妻は出産の時以外に入院をしたことがありません。それに比べてわたしはといいますと、胃潰瘍による吐血で二回、肺結核で一回、前立腺肥大では検査入院を含めて四回、更に、胆のう結石その他で五回といったぐあいで合計十二回も入院しています。

吐血というと、このようなことがありました。営業会議があって本社がある神戸のホテルに泊まっていた時でした。朝、歯を磨こうとすると急に吐き気がして、コーラーのような液がドッと出てきました。同時に心臓が物凄い勢いで脈を打ち、今にも倒れそうになりました。しかしやっとの思いでそれに耐え、あっちにつかまり、こっちにつかまりしてようやくベットのそばまで戻り、震える手で受話器を取りました。ところが、話せないのです。話そうとすると吐き気がして、どうにもならないのです。そのため、

「く、く、くるしーい。た、た、たすけてー」

と言ったまま受話器を置き、だれかが来てくれるのを待ちました。しばらくして、

「山本さん、大丈夫か？　山本さん！」

という岡田課長の声・・・、続いて井上と前田という若い社員の囁きが聞こえてきました。

「返事あらへん。もうあかんのやろか？」

「そうかもしれへんなあ・・・可哀想に・・・で子供さんは？」
「二人」
「二人か、ふーん。それで、奥さんの年は？」
その囁きにたまりかねた岡田課長に、
「アホウ！　何をごちゃごちゃ言うとるんじゃ！　早う救急車を！」
と言って叱られ、井上が電話機の方へすっ飛んでいきました。
「ハイ、そうですねん。たのんます。早う来てください。息？　息でっか？　まだしてます。そやけど、虫の息ですわ。ハイ、そうですねん。今にも・・・」
大きな声でしゃべる井上の声がはっきり聞こえるのですが、口をきくことができない私にはどうすることもできません。
やがて救急車がきて近くの病院に運ばれ、応急手当てをしてもらった後、新幹線で東京駅まで戻り、迎えに来てくれた妻に抱きかかえられるようにして地元の病院にいきました。
と、まあ、そんなこんなで妻に大変な心配と苦労を掛け、退院の時に、
「これで、もう〇〇回ですよ。あなたが入院する度にわたしがお世話をしてきたのですから、わたしが病気になった時は、しっかり面倒をみてくださいよ」
と、言われてしまいました。

六、見習い主夫のため息

定年を迎え、第二の人生について真剣に考えようとしたことがありました。
（趣味であれボランテアであれ、要は楽しく、一日でも長く続けることができて費用はかからない。しかも、そのことを通して生きがいを感じることができなければいけない）
などと、虫のいい事ばかり考えるのでなかなか見つけることができません。で、妻に助けを求めると、
「あなたの希望にピッタリのボランティアが、家の中にあります」
と言うのです。おどろきました。が、詳しく聞くと、台所の手伝いだと言うのでがっかりしてしまいました。それでも妻は、
「いつまでも続けることができますしお金もかかりません。それに、慣れればなれるほど楽しくなって、生きがいだって感じるようになりますよ」
と、笑顔で言うので敵いません。まあ、そんなこんなで結局、翌朝から台所の手伝いをすることにしました。といっても最初は食器を洗うだけでした。が、その内、焼きそばやおでんなどをつくる手伝いをもするようになりましたし、買い物にも行きました。そして以前は、妻がチラシを見ながら、

「A店ではキャベツが百円で買えるわよ」
とか、
「お醤油はB店で買った方が三〇円も得ですよ」
などと言うのを耳にしても、
「安いと言ったところでせいぜい二〇円か三〇円、うんと安く買えたといっても五〇円そこそこ。その程度のことで、しんどいのに、二〇分も三〇分も走り回るのでは引き合わん。それこそ骨折れ損のくたびれもうけや」
と言って笑っていたわたしが、三カ月も経つと、
「バナナはこっちの方が安いけど、品物はあっちの方がよかったみたいやなー、やっぱり、あっちで買った方がええのかいなあ・・・」
などと言いながら、あっちへ行ったり、こっちへ行ったりと、いそがしく走り回っているのです。しかも、不思議なもので、財布の中にうなるほどの金があっても（誰のことかいなあ？）、一度安い時の値段を覚えてしまうと、わずか二〇円か三〇円の出費増でも、ものすごく高いように思えて手が出なくなってしまうのです。
「それにしても、今年はキャベツの値段がクルクルクルクル、よくまあ上がったり下がったりしますわなあー、いや、ほんまに・・・」

七、摂理

台所の手伝いをするようになって二年ほど経ったころでした。義兄から、「義父に認知症の症状がみられるようになった」との電話が入り、わたしたちはその足で義兄の家に駆けつけ夜を徹して話し合いをした結果、一ヶ月毎の交替で介護をすることになりました。

認知症介護という難しい問題を只一回の話し合いでまとめることができたのは、両家族が比較的近いところに住んでいたこと、また、共に介護をする余力があり（義兄も私もリタイアしていた）、しかも両家族の仲が良くどのようなことでも忌憚無く話し合えるという良好な関係にあったからで、もしそうでなかったとしたらとてもできなかったと思います。

といった訳で、リタイアをして二年目の一二月から義父を交代で介護することになりました。わたしたちが受け持ったのは奇数月で、その月の一日になると、「おとうさん、行きましょか」とわたしが声を掛けます。すると義父が、「どこへ」と聞いてきます。で、わたしが「千葉のお姉さんのところへ」と言うと、「よしわかった」といって機嫌よく車に乗ってくれるのです。そして義兄の家に着くと、「この家は初めてやきに、どうも勝手が分からん」と言いながら、独りで洗面所に行って手を洗い、うがいをしたあとリビングに来て、「桂井久義と申します。よろしくお願いいたします。」

と言って頭を下げます。が、それがすむと、とたんになれなれしくなって、「おーい、お茶をくれ」と大きな声を出すのですから笑ってしまいます。

で、義父がお茶を飲んでいる間にわたしたちは引継をすませ、帰りの支度をするのですが、それを見て義父が、「おまんらはどこへ行く」と聞いてきます。で、「帰るんです。埼玉の家に」と言うと、「ほほう、おまんらは埼玉にいるがかよ」と、初めて聞いたような顔をします。その様子を見て妻が笑いながら、「そうよ、お父ちゃん。近くですから、私たちの家にも遊びにきてちょうだい」と言うと、「よし分かった」と言って、機嫌よく見送ってくれるのです。

もちろん、このようにうまくいく日ばかりではありません。深夜に起きてきて「今から高知に帰る」と言い出したり、さっき食べたことも忘れて、「この店はいつになったら飯を食わすんじゃ！」と言って騒いだり、食事の最中に、「子供がいても、わしの面倒をみてくれるもんが一人もおらん。ああ、あー、死んだがましじゃ」などと言って、私たちをいらいらさせることがよくあります。それでも、介護をやめようと思ったことは一度もなく、十年近い間最後までやり遂げることができたのは、介護に必要な条件が神の導きと守りのもとに、すべてクリアされたからであったからで、心から感謝をしています。

八、聖書輪読

「ねえ、これからは毎日、いっしょに聖書を読みませんか」

わたしが飛び上がって喜ぶほど嬉しいことを言ってくれたのは、二〇一〇年一一月一日の朝、妻が七四歳の時でした。もちろんその日から輪読を始めました。どうしても読めない時には、その前日または翌日に読むということにして、二〇一六年一二月一六日の朝までの六年と一か月半で、旧約聖書一回と、新約聖書を七回、それにマタイによる福音書の一六章までを読み、妻は天のみ国に帰っていきました。今思いますとその輪読は、み国に帰るための準備だったように思えてなりません。

み国に帰るための準備といえば、このようなこともありました。輪読を始めた翌年、妻が七五歳になったころから、圧迫骨折で背中の骨が横（くの字）に曲がり、その痛みで長時間台所に立つことができなくなってしまいました。そのため、皿洗いと買い物の他は気が向いた時だけでよかったわたしの仕事がどんどん増えて、昼と夜の食事の用意をも、わたしがするということになってしまいました。もちろん、料理の本を読みながらですが、一回目は真面目にレシピを読んでも、二回目からはいいかげんな読み方をしたり、読まずにしたりするものですからうまくできません。そのようなわたしを見て、

「もしわたしが先に死んだらどうするんですか。今の内にしっかり覚えておかないとほんとに後悔しますよ」
と、言いにくいことを妻が平気で言うのです。それだけではありません。妻が、七十六歳になったころからは、
「わたしはお母ちゃんが死んだ七八歳まで生きられたらいいと思っているんです。それ以上は生きたいとは思いっていません」
といったことも言うようになりました。しかし、いくらそのようなことを言われても、わたしより四歳も年下の妻が先にいなくなるなど、とても考えられず、その都度、ヘラヘラ笑って聞き流していました。ところが、その妻が七九歳になってからは更に言い方が変り、
「とうとう、お母ちゃんより一年も長く生きてしまいました。もう、いつ死んでも悔いはありません。コロッと、苦しまずに死ねたらいいのに・・・」
といったことを言うので返事に困り、
「そんなにうまい具合にいきますかいな」
と、わたしが苦笑しながら言っても、
「いいえ、わたしは八〇歳まで生きられるとは思っていませんから」
と、真顔で言うのです。呆れてしまいました。

九、別れ

話を進めます。妻が亡くなる少し前のことでした。夕方になって近くのコンビニへ行きたいと言うので、いっしょに家を出て少し行くと、

「肩を貸してちょうだい」

と言って、わたしの腕を軽くつかみ、

「はじめてですよね、こんなにして歩くのは・・・」

と、嬉しそうに笑うのです。

そのような事があった数日後の朝、妻が突然寒いと言って震えだし、熱を測ると三八度五分もありました。わたしは急いで一一九番に電話をし、苛々しながら救急車が来てくれるのを待ちました。ところが救急隊の人が、

「多分風邪でしょう。体が震えるのは熱が上がろうとしているからです。もう少し熱が上がれば震えは止まります。この程度でしたら心配することないですよ」

と言うのでほっとしました。病院でも同じような診断で三日分の薬を調合してもらい、急いで駆けつけてくれた長女といっしょに、

「よかった、よかった」

と言って喜び、長男夫婦と妻の姉に、
「風邪だったんだって、だから入院の必要もないので病院には来なくていいよ」
との電話をして家に帰りました　ところが翌朝になって目まいがすると妻が言い出し、再度救急車をお願いして病院に連れて行ったところ、今度は医師が、
「大変厳しい状態です。しかしできる限りの手を尽くしていますので・・・」
と、深刻な顔をして言うのです。しかし前日に風邪と言われていたので、わたしたちには「大変厳しい」という意味を理解することができず、長女と長男といっしょに、面会時間が終わった午後の一〇時に、翌日また来るから頑張るようにと妻に言って病院を出ました。
ところがです。病院を出て三〇分も経たないうちに病院の医師から、
「人工呼吸器を付けるかどうかで相談したいので、すぐ来てほしい」
との電話が入り、わたしたちは急いで病院に引き返しました。しかし、わたしたちが病室に着いた時はすでに妻の意識はなく、しばらくして最期の息を引き取りました。
　あっという間の別れで、せめて意識のある間に、「ありがとう」の一言も言えなかったことが悔やまれてなりません。けれども、もしこれが逆で、わたしが先に死んでいたとしたら、体の不自由な妻が大変な苦労をしたかもしれないと思うと、やりきれない悲しみも少しですが、和らぐのでした。

十、再会の望み

はじめに書きましたようにわたしの作品の一番の読者であり、この作品の依頼者であった妻はもうこの世にはおりません。しかし、もし妻が天国で作品ができるのを待ってくれているとしたら、いや、もしかではない、妻のことだからきっと待ってくれているはずです。

そう思って書き始めましたが、妻との会話を思い出したり残していったものを見たりする度に涙が出て、何度も書けなくなることがありました。中でも、毎日の出来事を書いたノートの欄外に、「人は一人では生きていけない」と、しっかりした字で書かれてあるのを見た時はあふれ出る涙でどうすることもできなくなってしまいました。

どう思って妻がその言葉を書いたのかはわかりません。もしかしたら自分の死期を悟り、後に残るわたしのことを心配して書いたのか、それとも、わたしが先に死んで、病を抱えた妻が一人になった時のことを心配して書いたのか・・・いずれにしても、「人はひとりでは生きていけない」という言葉を妻が残していったことは事実で、そのことを思うと胸がつぶれる思いがして、いよいよ書けなくなってしまうのでした。

それでも気を取り直して妻と出会った時から別れの時までのことを書き続けている内

に、わたしの心の中にあった妻との再会、そう、「いつの日か、また天のみ国で会える」との望みが、硬くて小さい蕾が春を前にして膨らんでいくように、わたしの心の中でだんだんと大きくなり、以前には思いもしなかった喜びが沸いてくるのでした。

内村鑑三の『一日一生』の中に、「復活は死別の苦痛に悩む者に、何人（なんびと）にも起こる希望である。永久の離別はわれらのしのぶあたわざるところである。復活の希望なくして、再会の期待なくして、死は慰めえざる苦痛である」と書かれてあるように、わたしもこの世での別れを決して永遠の別れとは思っていません。いつの日か必ず天のみ国で、また妻に会えるとの希望を持って、残るこの世での生を歩んでいきたいと思っています。

妻は　鶴を折るのが好きでした
幼子がそばにいれば　その鶴をあげ
ときには　いっしょになって折っていました

妻は　鶴を折るのが好きでした
今ではその鶴が　千羽も二千羽も
それでも妻は　今もイエス様のそばで鶴を折り続けています

愛唱聖句

＊伝道の書三章一一節
神のなされることは皆その時にかなって美しい。

＊マタイ五章八節
心の清い人たちはさいわいである。彼らは神を見るであろう。

＊第一コリント一〇章一三節
神は真実である。あなたがたを耐えられない試練に会わせることはないばかりか、試練と同時にそれに耐えられるように、のがれる道も備えてくださる。

愛唱賛美歌

＊讃美歌八五番　主のまことはありその岩
＊讃美歌二九八番　やすかれ、わがこころよ